Rocky Ridge Holsteins

第13号

小報もがみ

とある牛飼いの暮らし

新型コロナも収まらないまま、見通しの立たない不安な年明けとなった。でも今年は丑年。牛のようにどっしり、力強くこの状況を乗り越えていきたい。今回は、最上町の特産のひとつでもある牛を育てている方に話を聞いてみたくて、前森高原の酪農家・郷野孝さんの元を訪れた。冬の前森は町中に比べると雪は多いが、一面真っ白の銀世界が美しい。Rocky Ridge Holsteinsと書かれた牛舎に入ると、ちょうど搾乳しているところで、搾り終えた牛たちは自ら順番に定位置へと戻っていく。ヒゲがとってもお似合いで、優しい眼差しの孝さんは、「あ～忘れてた～」と突然現れた私に驚きつつも、少しずつお話を聞かせてくれた。

昭和２３年の戦後開拓で河北町から祖父の正さんが入植してきたのが始まり。前森はもともと、茅葺屋根の材料となる茅が生い茂っていた場所だった。開拓当初は水が引けず、米も作れないため、炭焼をして生計を立てていたという。それから農耕や運搬用の和牛を飼い始め、孝さんが生まれた昭和３４年から、毎日現金収入を得られる酪農を始めたそうだ。

孝さんも後継者になるつもりで農業高校に通い、もっと牛飼いの勉強がしたいと考えていた時に、アメリカに行くチャンスが訪れた。英語もほとんど話せないまま現地に入り、気の短い主人に怒られながらも、日常会話程度の英語も身につき、なんとか2年間の実習を終えた。大学には行かなかったが実践で勉強が出来たことはいい機会になった。

日本に戻り、２６歳で結婚。子どもも生まれ、「気合を入れて頑張らなきゃならない」と、１９９０年に現在の牛舎を建てた。牛舎の名称である「Rocky Ridge Farm」は、大好きな小説〝大草原の小さな家〟シリーズの〝農場の少年〟に憧れていたことから付けたそうだ（アメリカ留学の際にも現地を訪れたことがある）。

前森は酪農に最適な土地。孝さんは恵まれた環境の中で酪農が出来る強みを生かしている。牛舎を建てた頃は借金を返すため、乳をたくさん絞れるように輸入飼料を与えるなど、試行錯誤だったそうだが、せっかく牛が産まれても、お金を返すために売らなきゃいけない。その繰り返しが最近まで続いたが、返すお金もなくなり、心にも余裕を持って向き合えるようになった。現在は若い頃に比べてシンプルになってきたと言う。牧草や飼料作物を自分で育て、その草をお腹いっぱい食べさせて、乳を絞って、健康な仔牛が産まれる、という良い循環が出来ている。牛自体もストレスが減って長生きするようになった。「ようやくこういう牛飼いでいいなっていうのが分かってきたのかな」。

それでも、朝早くに起きて、牛舎の掃除や餌やり、搾乳、出荷…絶対にやらなきゃならないことが毎日ある。生き物相手なので休みはない。「聞きしに勝る過酷な仕事です。３Ｋと言われるが、それ以上だね」と孝さんは笑う。「でも、何とも言えない良さがあるんだよな。だからやめられない」。

仔牛が産まれると名前をつけ、家族が増えたことをみんなで喜び合う。牛が亡くなれば涙を流して悲しむ。娘が牛に跨って遊んだり、眠くなればふかふかの寝藁で仔牛と一緒に眠ることもあったそうだ。「牧草地で草を刈って乾かしている時にすーっと吹いてくる風の気持ちよさは、お金に変えられない価値がある」と、大変な仕事の先にある喜びを教えてくれた。

朝起きると薪ストーブを焚いて、お湯を沸かし、珈琲を淹れて奥様お手製のパンと牛乳で朝食をとる。パンに塗るブルーベリージャムも自家栽培のもの。鶏も３羽飼っている。牛飼いは大変ではあるけれど、やり方によっては質素ながら適度な規模でスローな暮らしを楽しめる。

「コロナ禍で、都会では毎日何千人と感染者が出ているけど、ここではその心配はあまりない。山村で暮らして仕事をする意義は顧みられるんじゃないかって思うよね。自分なりに、この場所を人生の楽園にしていけたらいい」。６０歳を超えてようやくそう考えられるようになったそうだ。

孝さんの背中を見て育った娘の祈さんも、現在酪農の修行のために高畠町の農場で働いている。「毎日大変だっていうのを超える面白みがあるということを感じてくれてるんだと思います」。

2021年1月27日発行
編集：最上町地域おこし協力隊 山﨑香菜子
情報提供や山﨑とお話したい方はご連絡ください
電話0233-43-2261（最上町役場まちづくり推進室）
メールhayakawamiyage@gmail.com